

# ジョグジャカルタの文化資源に関する研究 —政治素養をはぐくむ場としてのカフェ・屋台・たばこ—

大庭フランシス光瑠

(広島大学大学院)

日下部 達哉

(広島大学)

## 1. はじめに

本研究は、インドネシア都市部住民が生活の中でいかに政治素養の教育や涵養をおこない、民意の醸成へとつながっていくのか、現地のカフェや屋台などで展開される「ノンクロン（現地語で非意図的なおしゃべり）」、とりわけ「政治に関わるノンクロン」に焦点を当て、その実態を明らかにする。調査・分析を通じて、ノンクロンが議論の場として住民間で政治素養を相互に形成しあうプロセスを、地域の「政治文化資源」の一部として検討することを目的とする。

本研究が対象とするインドネシアは、スハルト独裁体制期（～1998）においては、カフェであっても政治談議は取り締まりの対象であったところ、スハルト政権崩壊以後、今日では、人々がカフェや屋台を始めあらゆる公共の場で、今日見たニュースの話題で持ちきりの政治談議が活発に行われている。本研究はこれを単におしゃべりの意味だけで捉えず、「政治素養をはぐくむ場」として捉えることが可能とし、人々に文化資本を与える地域資源の「総体」としての「文化資源」に着想を得て、政治文化資源の一部としてのノンクロンについて考察を行うものである。ノンクロンを含め政治文化資源に着目することで、スハルト政権期に集会が禁止されて以降、見落とされてきた住民同士による非意図的な政治素養の涵養が可視化される。政治のオンライン化やデジ

タル化がすすむ昨今だからこそ、物理的な場で非意図的に獲得される素養・教養について検証しなおす必要がある。というのも、現在も選挙広報のオンライン化やSNSの発達によるデジタル空間での政治意見交換は、インドネシア当局による厳しい監視が敷かれており、むしろノンクロンを通じて展開される「本音」、「内緒」のおしゃべりにこそ政治素養を教育する効果に富んでいるはずである。スハルト政権崩壊から25年近くが経過し、民主化、そして次の世代へ変化を続けるインドネシアにおいて若者の政治素養涵養の実態を明らかにする。

本研究ノートは、2022年8月28日から2022年9月8日までの間にインドネシアの地方都市ジョグジャカルタ特別州ジョグジャカルタ市で行った文化資源探訪調査の考察である。ジョグジャカルタはインドネシアが国家として成立する以前のマタラム王国時代から続くジャワ伝統文化継承の地として、象徴として国策による文化保存、教育都市化計画が進められた地域である。調査期間中、ジョグジャカルタ内の複数の博物館美術館、史跡、地元市場、外資系ショッピングセンター、地元の屋台、カフェ、教育機関などを訪れた。ジョグジャカルタの住民は古くから続く文化が根付く自分自身の地域に対して誇りを持っており、また他地域の人々にとってもジョグジャカルタは文化都市・学園都市として憧れを持たれており、国内外から多数の観光客や大学進

学等に起因する流入者がいる。ジョグジャカルタは国家による文化的統一を目指す政治意図に対して住民の受容的民意形成が特徴的だとも言うことができ、市内に複数存在する国立の歴史博物館はインドネシアの独立時にジョグジャカルタが果たした役割（代理首都）についての展示から始まり、王国の文化は「インドネシアの文化」として継承されたものとしての紹介に留まるが、ジョグジャカルタの住民にとってはジョグジャカルタ市がある前にインドネシア国家があるとして、国家による王国文化のインドネシア文化としての象徴化も住民から受容されているようだ。また近年ジョグジャカルタでは商業地区マリオボロの再開発を機に、従来数多くあったコーヒー粉・砂糖・ミルクの3in1インスタントコーヒーにお湯を注ぐだけの屋台カフェではなく、インドネシアのみならず世界中の生産地から豆を取り寄せ、焙煎方法やドリッップ方法、内装、電源、Wi-Fiにこだわった「カフェ」にお金と時間を費やすことがステータスとなっている。そのため、本研究では、住民の政治素養涵養に資する非意図的な議論の現場として、従来の「屋台、現代的な「カフェ」、そして道端などの生活空間における「たばこ」の場に着目して調査を行う。

## 2. 研究の背景

### 2.1 現代インドネシアにおける政治素養教育・涵養の課題

インドネシアの住民が日常生活から得ている政治素養について考察するために、現代インドネシアにおける政治素養を獲得するプロセス、民意を醸成するプロセスの課題を示す。インドネシアでは1998年のスハルト政権崩壊後に権威主義的中央集権体制が緩和、民主化・地方分権化に進展がみられた、とされている（松井、2003）。たしかに地方自治体を持つ財源自主性は飛躍的

に向上し、国家政府から知事が各地方に派遣されていた独裁政権期と異なり、地方知事の直接選挙が始まったことを踏まえると、制度上の地方分権や民主化つまり地方公共団体としての地方自治は向上したといえる。しかし未だ地方政党結党は禁止されており、各全国政党の支部が地方に配置される「政党」政治が展開されるため、地方議会自体も政党支部同士の政治と化しており、下からの民意が届くような構造にはなっていない。つまり「国家-地方関係」はトップダウンの統治システムを維持し続けている。従来のインドネシア地方政治研究では、分権化や財源自主性を前提に、地方自治が進んでいると論じられてきた（同上）が、インドネシア地方自治は上記背景によって、民意による政治決定や政治参加が、未だ希薄な状態といえ、民主化により拾われるはずの住民の政治的な声そのものや政策への反映のありかたは見えにくいことが指摘できる。

「住民がいかに政治素養を獲得、形成しているのか」という研究は、Parinduri (2019) が、学校教育内の政治教育を研究しているが、インドネシア住民が「投票に向かう」ために学校教育が果たす役割については論じられており、学校教育と住民の参政の姿勢の優位相関から、学校教育内の政治教育が住民の選挙行動を促進していることはわかっている。しかしながら、住民が選挙で「だれを選ぶか」という選挙関心と学校教育の間には相関関係が見出せず、つまり学校教育のみでは民意醸成の方向性の決定付けが完了しているわけではないことがわかる。ここから定型的で国家統一を図るべく敷いた学校教育システムの外にある、住民の日常生活文化がもたらす民意醸成プロセスに改めて焦点を当てなおす必要がある。

### 2.2 住民の日常生活文化がもたらす民意醸成に対する影響の理論枠組み

日常生活による政治素養涵養、民意の醸

成への着目により、民主化したインドネシア政治の住民の声を描き出すために、住民の日常生活文化がもたらす民意醸成に対する影響の理論枠組みについて考察する。独裁政権に対する政治的抵抗の理論家として有名なジーン・シャープは『独裁政権から民主主義へ』の中で、非暴力行動 198 の方法をまとめているが、そのなかで住民の日常生活の中の非意図的な行動が独裁体制に対抗しうる政治的抵抗力として醸成の可能性があることを強調している（シャープ、1993）。特に、シャープは会話による民主的な抵抗の意志の伝播を取り上げ、いわゆる「井戸端会議」で政治的な意志が住民と住民の間で広がっていくことを示唆している。シャープによって作り上げられた理論枠組みは、民主化を市民が目指して起こる独裁体制の崩壊を対象に論じたものだが、独裁体制崩壊以後に民主化を目指す国家の市民たちの政治素養涵養にもこの理論枠組みは適用可能で、日常の中の非意図的な行動が政治素養を人々の間で伝播していく可能性があり、本研究では 1998 年のスハルト独裁政権崩壊以降、民主化が進んだとされ、それまでは 5 人以上集まって会話することすら許されなかったインドネシア住民の日常生活の中で、現在はノンクロンを通じて政治素養涵養が行われていることを検討する。また知識を持つことに留まらず、感情として、行動として政治的な意志が伝播していくことを示している点が、民主化したインドネシアの政治素養の涵養についても同様に考察するべき点である。

### 2.3 日常生活における議論の場が人々にもたらす教育的な意義

日常生活における会話の場、議論の場が政治的な意志の伝播に影響していることを踏まえて、日常生活における議論の場が持つ教育的な意義についてまとめる。まず、日常生活の中で、教育的な意義をもつ、特

に政治素養の涵養を意図的に付与する活動、換言するならば「議論の場づくり」について考察する。住民の日常生活の中に教育的な意義を意図的に付与した議論の場を機会提供から考察したものとして Sovann (2016) によるカンボジアにおけるジェンダーカフェプロジェクトについての考察が挙げられる。ジェンダー格差に起因する暴力の存在が、カンボジアでそれまで認知されながらも具体的な対策がなされず、住民の関心を引くに至らなかった。ジェンダーカフェとして住民の日常に議論の機会を提供すると、ジェンダー格差・暴力への住民の理解とエンパワメントが促進されたことが示されている。このように、住民に対する機会の意図的な提供によってジェンダー格差といった政治課題・社会課題に対する理解が促進されるといった、政治素養を涵養する効果についてはすでに論じられている。

さらに、Sullivan (2010) や ODonell ら (2021) の図書館におけるラーニング commons の研究から、住民の日常生活の中に議論の場を空間提供の観点から行う研究もすでに進んでいることがわかる。ラーニング commons は元来、アカデミア内で細分化されてしまう学習・研究を総合化・多視覚化することを目的に、図書館内で資料を持ち込んで学習者同士で議論をすることができるスペースのことであり、学習者による自発的な学習や情報の共有、そして「議論の場作り」を空間の提供により活性化させていると論じられている。一方で近年はデジタル化やオンライン化の影響を受けて、ラーニング commons を図書館内に設置するにとどまらず、また目的や利用方法も多様化しており、特に通信環境やデジタルオーディオ設備、電源設備を完備した、対面・オンライン両者のハイブリッド会議室の様相をなすラーニング commons が増えていることが論じられている。ラーニング commons として空間を提供することによって学習者同

士の相互の交流から生まれる学びがあることから、議論の場作りを空間提供の観点から意図的に行うことの教育的意義はすでに世界で検証されている。

日常生活の中で意図的な「議論の場づくり」について考察する研究は機会提供・空間提供の観点から様々に行われている一方で、日常生活の中で、非意図的な議論の場が存在していること、そしてその議論の場の教育的意義・効果を追求する研究は、なされていないに等しい。インドネシアの首都ジャカルタにおける思春期の青少年少女たちの“hang out”の習慣・文化について、都市工学の観点から場所に着目して論じたAtmodiwirjo(2008)の研究は、ジャカルタの若者がどのような場所で社会化するスキルを得ているのか研究したものである。それによれば、若者は放課後、「家庭」、「学校」、商業施設・娯楽施設・飲食店といった社交の場として設計された「*planned place*」、そして第4の環境ともいうべき道端・階段下・バス停といった「*unplanned place*」で友人や家族とおしゃべりをしながら過ごし、社会化のスキルを養っている、とされている。この研究では、日常生活の中に意図が介在しない場である「*unplanned place*」の存在を論じた点が、日常生活における議論の場の意義・役割について示唆に富んでいると言えるが、一方で「社会化する」ことの具体的内容や意義についての検証が不十分であり、非意図的な議論の場が住民に与える教育的意義・素養涵養の効果に関してさらなる観察と検証が必要である。

日常生活における議論の場を、インドネシア、特にジャワの文化である「ノンクロン」から芸術家たちを研究対象に論じた研究(Dahl, 2016)では、制作と制作の合間におこなう、コーヒーやたばこを片手に語り合う「ノンプロダクティブ」な時間こそが芸術活動にとっても、芸術家同士の連携の維持にとっても効果を発揮していると論じ

ている。調査対象となったジョグジャカルタの芸術家コミュニティに所属する芸術家の中には「ノンクロンは私にとって、学校と呼んでも過言ではない」(同上)と語る者もいて、ノンクロンの中で行われる同業者との会話の中に、技術的なあるいはテーマに対する示唆が多分に紛れ込んでいるとし、ノンクロンのような日常生活内に存在する会話の時間が、議論の場として上下のあるいは横のつながりを創出し、互いに教育しあう関係性を作り出すことを示唆している。このDahlの論説を踏まえて、日常生活の会話の場であるノンクロンの中で、政治に関する情報の拡散、意見の交換、政治的な思考力の教育がおこなわれている「議論の場」としての実態の調査を通じ、非意識的な日常生活の現場で住民が自ら政治素養を涵養していることを仮説づけることは可能である。

#### 2.4 住民に政治素養涵養の機会を提供する文化資源

非意識的な日常生活の議論の場が教育的意義を持つとき、そのような場と地域の関係性はいかなるものとなるだろうか。佐藤(2018)は、ある地域・社会に暮らす住民に対して教養、ひいては文化資本を与える「モノ」、「コト」の総体を文化資源として役割を見出し、地域には住民の習慣や社会の変遷を分析するための、あるいは住民が持つ文化資本の方向性を分析するための史料・資料が資源として未開発のままである、としている。文化資源の考え方は元来、博物館学を支える文化経営学の発想から生まれたもので、史料・資料に対しての価値づけを、住民に与える文化資本的影響から行うものである。文化資源の一種として佐藤は柳田國男が分析した「酒の場」についても取り上げており、明治ごろまで酒の場が公の儀式・祭典の一環であり、酒の場が持つ統治上の役割や権力維持上の役割の強さがあったが、明治以降、酒は広く庶民も家庭など

の私空間で楽しむようになり、その私的な酒の場のなかで見えない伝達が発生しており、このような酒の場の役割の変遷も史料として、そして酒の場そのものも資料として、住民に教養を授ける文化資源であると規定している。

このような「酒の場」が持つ文化資源としての役割から、「会話の場」であるノンクロンに対しても文化資源としての意義を見出すことができ、分析の対象とする。ノンクロンは元もとスラングとして、仕事を「さぼって」道端で油を売っていること、「だべる」ことを指していたが、現在はジャワの文化として友人や仲間などと連れ立って、コーヒーなどの飲み物やたばこを楽しみながら、「おしゃべり」を楽しむ時間、として意味変容が起こっている。そしてこの会話の中で、上述の Dahl (2016) が述べたように、意見交換や教育がおこなわれていることから、ノンクロンは住民に教養を与える文化資源として意義深いといえる。本研究では特に、住民に対して政治素養を涵養する文化資源として、日常生活における非意図的な議論の場としてのノンクロンを「政治文化資源」の一部であると規定し、調査することとする。

## 2.5 問題の所在

これまで述べてきたように、インドネシアは1998年のスハルト独裁政権の崩壊以降民主化が進んだとされているが、制度としての進展は論じられても、その民主化を牽引する住民の意志の涵養のあり方は論じられてこなかった。また、住民の日常生活の中で、機会提供や空間提供に牽引される意図的な「議論の場作り」については検証が進んでおり、政治的意志の醸成や住民同士で互恵的な学びを行う教育的効果について論じられてきたが、生活の中で非意図的に発生する「議論の場」がもつ教育的効果や民意の醸成、そのプロセスとしての政治素養の涵養や伝達について論じたものは少な

い。換言すれば、「提供された」空間や機会ではなく、「そこにある」空間や機会が持つ素養獲得可能性に関して論じた研究は少ない。つまり、住民が日常の生活の場面で実際に民意を醸成する過程を、議論の場としてのノンクロンの文化資源的位置づけを検証する必要がある。それはまさに我々が眼前に展開されながらも看過してきた屋台であり、カフェであり、たばこであり、街角でのおしゃべりである。

## 3. 研究の目的

上記の背景から、本研究では住民が日常生活のなかから得られる非意図的な議論の場としての政治文化資源が持つ、住民同士の政治素養獲得・民意醸成に対する意義・効果を明らかにするため、以下二点を目的とする。

(1) インドネシア地方都市ジョグジャカルタにおける政治文化資源としての非意図的な議論の場（ノンクロン）が、いかに住民の政治素養涵養に影響をもたらしているのか、場の教育効果・機能について現地調査を行い解明する。

(2) (1) で明らかになった政治文化資源としてのノンクロンと政治素養涵養の効果から、住民同士による非意図的な議論の場を支える環境要因を取り上げ、そのような住民を取り巻く環境を改めて政治文化資源としてのありかたの仮説を生成する。

本研究は上記の通り、住民の非意図的な議論の場を「政治文化資源」として位置づけ、住民の政治素養を涵養するものとして、観察・調査を行い、議論の場であるノンクロンの教育的効果を検証することを第一の目的とし、議論の場が発生する環境要因を考察することを通じて、今後の文化資源研究に対して仮説を提示することを第二の目的としている。本研究を通じて、議論の場の様態が明らかになり、住民同士による意見交換の実態や教育のあり方が描き出される。

描写を通じて、議論が発生する条件としての環境要因も検討することができ、政治文化資源であるノンクロンを支える文化資源が存在することを仮説付けられる。

#### 4. 研究の方法

本研究では、上記の研究目的を達成するため、フィールド調査を採用、ジョグジャカルタ特別州ジョグジャカルタ市の住民を対象に、政治素養涵養の現場とそれを生み

出す環境を調査し、それらを政治文化資源として位置付ける。調査期間は2022年8月28日から2022年9月8日にかけて実施し、4件のノンクロンの参与観察を行った(表1)。

#### 5. 結果

##### ノンクロン①(2022年8月28日)

ノンクロン①は、駅付近のカフェAで行われた会話である。このカフェでは店内で

表1 参与観察を行ったノンクロンの概要(筆者作成)

ノンクロン	日付 場所	話題概要	参加人数 参加者属性概要	ノンクロン環境
ノンクロン①	8月28日 駅付近のカフェA	文化・宗教のありかた	3人(A-1、A-2、A-3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国・台湾で流行した飲み物(タピオカやチーズティーなど)をメインの商品としている</li> <li>・店員は英語でのコミュニケーションが可能である</li> <li>・駅付近にあるため、ジョグジャカルタ内外の人が訪れる</li> <li>・店内ではラジオを流しており、音楽やニュースが流れている</li> </ul>
ノンクロン②	9月2日 商業施設内 カフェB	コロナ対策と観光への影響 現政権のパフォーマンス LGBTQ	2人(B-1、B-2) 学生(B-1、B-2、学校種不明)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電源、Wi-Fi、空調完備</li> <li>・再開された商業施設徒歩圏</li> <li>・外国人観光客(オーストラリアなど)が多数来店している</li> <li>・世界中から仕入れたコーヒー豆をそれぞれ異なる方法で焙煎し、抽出する</li> </ul>
ノンクロン③	9月3日 屋台C	道路交通法規制 食料品の高騰 経済格差	3人(C-1、C-2、C-3) 学生(C-1、学校種不明)、事務職(C-2、C-1の母親)、屋台C店主(C-3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テレビがあり、常にニュースを流し続けている</li> <li>・ストリートパフォーマーがバイオリンを鳴らしながら屋台と屋台を行き来している</li> <li>・地元の市場から徒歩圏であり、午前中の買い物を済ませた人が朝食・休憩を取りに訪れる</li> </ul>
ノンクロン④	9月5日 D大学入り口付近路肩	原油の高騰とインドネシア経済	3人(D-1、D-2、D-3) 大学生(D-1)、Gojekドライバー(D-2、D-3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の入り口付近の路肩で、バイクタクシーアプリGojekドライバーのたまり場</li> <li>・大学生は空いているドライバーに乗せてもらい、帰路につくか、あるいはその路肩でアプリを操作し、付近を走行中のドライバーを呼ぶ</li> <li>・日陰になっており、15分以上その路肩に留まるドライバーもいる</li> </ul>

観察に際し、会話の中での話題を記録し、話題の変遷を通じて住民の政治的課題への知識・関心を調査した。各ノンクロンはおおよそ30分前後で、ノンクロン内における使用言語は主にインドネシア語、筆者は参与して質問する際、インドネシア語と英語の両方を使用した。

ラジオをかけており、音楽の合間にニュースが流れる。このカフェで目玉商品として取り扱われているのはチーズティーやタピオカドリンクなど、韓国や台湾で先んじてブレイクした商品を「トレンドを追っている店」として取り扱っている。その一方で、売られているフードの多くはオランダ占領時代に輸入されて以降現地で味の現地化をされながら親しまれているチーズパンなどであり、海外のトレンドを追いながらも、現地の味を残した場所であり、若者のみならず客層が利用していた。インドネシア語のラジオがかかる店内でニュースの合間に流行の音楽がかかる。A-1はインドネシアのカフェ、インドネシアのラジオなのに、売っているものは韓国ではやったドリンク、流れている曲はK-popで変だ、と話しはじめた。A-1はそのままインドネシア政府が自国文化を大切にす政策を打ち出さないから若者がどんどん自国文化ではなく他国の文化を好きになってしまう、と続けた。A-1は実際、上述のチーズパンをたのみ、タピオカではなくカフェオレを注文するなど、インドネシア文化を尊重したい意志があることがうかがえた。A-1はK-popの歌手たちは肌の露出が多いことにも触れ、あまりよくないと語っていた。A-2とA-3はタピオカを飲みながらA-1の話聞いていた。

#### ノンクロン② (2022年9月2日)

ノンクロン②は、商業施設内カフェBにて学生同士で行われた会話である。カフェBはSNSによるPRも盛んであり、また再開された商業地区の中にあり、ジョグジャカルタ内外のみならず、国外からの観光客も多く訪れるカフェである。このカフェはいわゆる現代的で高級志向(1杯20,000ルピア前後、屋台で飲むコーヒーのおよそ4倍)なカフェで、観光名所であるだけでなく、ジョグジャカルタ住民にとって、このカフェで時間とお金を費やすことは一種の

ステータスとなっている(B-1)。B-1はカフェや近辺の商業施設、観光地に外国人観光客が多数訪れるようになったことに触れながら、緩和されつつあるインドネシアのコロナパンデミック水際対策について、ロックダウンは長く実施し、学校の閉鎖も長引いたし、いまでもマスクの着用やワクチン接種証明の形態が義務付けられていて、国際水準よりも厳格な体制だったのに、海外からの観光客はほかの国が往来を始めた途端に解禁してアンバランスだと話した。さらにスマートフォンでネットニュースやSNSで情報を探しながら、外国人観光客受け入れ拡大の方針を立てた現大統領が近日中にほかの国の首脳と会合している様子から、大統領が国民に対しても、対外的にもパフォーマンス重視で、実態が伴っていないとした。B-2はそれをききながら、近年観光客の減少により再開された商業地区の店の売れ行きが悪くなっていることを話しながら、訪れる人が増えて、お土産を購入する人が増えないとジョグジャカルタもインドネシアも立ちいかなくなっていくと話し、感染者が増えたら対策を強化し、落ち着いたら弱める、を繰り返すしかないと話していた。B-1はそういった対策の強化、緩和の繰り返しの必要性はわかっているが、現大統領は世論へのパフォーマンス、対外的な他国へのパフォーマンスでころころと態度を変えすぎているとし、一度は国際的な流れに乗ろうとしてLGBTQ等性的マイノリティに対して融和的な政策を打ち出した



図1 カフェ内装の様子(筆者撮影)

が、言論が過激な集団の反発を受けて撤回したことをやり玉に挙げた。B-2はそれを聞きながら、LGBTQはイスラームの価値観から考えたら受け入れがたいし、ほかの国が寛容だからと言ってインドネシアもそれに倣う必要はないと話した。

### ノンクロン③(2022年9月3日)

ノンクロン③は地元市場の近辺にある屋台Cで観察したノンクロンだ。この屋台Cにはテレビが設置されていて、ニュース番組をずっと放映している。付近の屋台には似たような光景が広がっていて、どの屋台でもテレビでニュースを見ることができる。市場に近いこともあって、屋台Cを含め付近の屋台は朝の買い出しや品卸しをおえた人々の朝食や、休憩としてにぎわっていた。親子で買い出しに来たC-1、C-2は店主C-3とバイクタクシーアプリGojekのドライバーの運転が荒く、事故の危険性もあるし、渋滞の原因にもなっているから、法規制してほしいねと話しながら料理を待っていた。市場での買い物があまり芳しくなかったようで、食料品の値上がり、特に鶏卵の価格がひと月で2倍になったことに憤慨していた。C-1が、母親であるC-2に価格高騰の原因を尋ねると、C-2はガソリン価格のつり上げに原因があるとしていて、その時ちよ



図2 屋台内に設置されているテレビ  
(筆者撮影)

うど流れたインドネシア政府による原油補助金の段階的打ち切りのニュースを見ながら、コロナ禍の経済支援策としての燃料補助金の打ち切りによるガソリンの値上がり、ウクライナ戦争や中東情勢不安が続くことによる輸入原油の値上がりがガソリンの値段をさらに上げていて、それによる輸送費の増大が鶏卵の価格高騰につながったと説明していた。店主C-3はその会話に混ざりながら、同じ値段で商品を出すには原材料の質を下げなければならないと話していた。

そんな折、バイオリンとギターデュオの物乞いと思しきストリートパフォーマーが屋台を回ってきて、投げ銭を要求していた。C-2は投げ銭を渡し、ストリートパフォーマーがほかの屋台へと移っていたあとで、近頃経済的な差がまた大きくなってきたと話し、知人は高級車を買っているのに、こうやって投げ銭しか稼げないストリートパフォーマーがいて、インドネシア人の中で差があっかわいそうだとはなしていた。それにたいして、C-3はお金持ちの外国人が増えることが嫌だと話していた。

### ノンクロン④(2022年9月5日)

ノンクロン④はD大学入り口付近で大学生D-1とバイクタクシーアプリGojekのドライバーD-2とD-3がタバコを片手におこなわれた会話である。D-2とD-3はガソリンの値上げに言及し、コロナ禍の大規模な移動が制限された中、Gojekドライバーが果たした人流・物流に果たした役割は大きいのに、また苦しい思いをしなければならないことに不満を漏らしていた<sup>1)</sup>。D-1は補助金の打ち切りでGojekの値段が上がるのはつらいし、物流全体が値上げを行うから、インドネシアの経済成長も止まるのではないかと話した。ドライバーたちは渋滞や環境破壊といった負の側面も過剰な交通社会が収まれば収まるかもしれないけど、自分たちは職を失うし、困ったもんだと頭



を抱えた。ドライバーたちは大学を卒業したものの、いい職にありつけず、ドライバーはいい給料がもらえなし、アプリを使った最先端の仕事で安定すると思っていたのに、と不安の声を漏らした。

## 6. 考察

本研究の目的に照らし合わせながら、ノンクロンの調査結果を考察する。

(1) インドネシア地方都市ジョグジャカルタにおける政治文化資源としての非意図的な議論の場（ノンクロン）が、いかに住民の政治素養涵養に影響をもたらしているのか、場の教育効果・機能について現地調査を行い解明する。

ノンクロンの参与観察を通じて、政治文化資源としての非意図的な議論の場が住民にもたらす教育効果・機能について、以下の3種類の類型に分類される政治素養の涵養に効果を持つことが示唆された。

**政治知識（認識）：**自分や地域、国家を取り巻く政治課題に対する基本的な知識を、資料・情報に基づいて十分に理解し、会話の話題にできる。

**顕著な例：**ノンクロン② B-1、B-2、ノンクロン③ C-2

**政治行動：**自分や地域、国家を取り巻く政治課題に対する自分なりの行動の軸（商品選択、募金、投票、デモなど）を持ち、その行動の軸を他者に発信することができる。

**顕著な例：**ノンクロン① A-1、ノンクロン③ C-2（、ノンクロン観察対象者だったわけではないが、デモに参加したGojekドライバーたちもノンクロン④ D-2, 3のようにドライバー同士の議論による行動に移す意志の涵養があったと類推できる）

**政治感情：**自分や地域、国家を取り巻く政治課題に対する強い関心を持ち、自身を

取り巻く日常に関連付けながら積極的に自分の考えを話そうとする。

**顕著な例：**ノンクロン① A-1、ノンクロン② B-2、ノンクロン③ C-3、ノンクロン④ D-2、D-3

日常生活における議論の場とは、住民たちが互いに政治知識（認識）・政治行動・政治感情を交換・複合化しながら、ボトムアップの方向性で政治素養を涵養している現場であると考えられる。ノンクロン②や③で顕著のように日常生活における非意図的な議論の場は、ある住民が持っている政治課題に対する自分が置かれている状況によって吐露される感情のみならず、知識（認識）が提示され伝達される現場でもある。また行動の軸を示し発信することも行われていて、この伝播が広がった先にある形がデモのような直接行動や選挙行動などに作用していくと考えられる。これらの政治知識、政治行動、政治感情は個々別々に存在するのではなく、深くむすびついて伝播・涵養され、住民の間で共有・交換されることが期待される。したがって、インドネシア地方都市ジョグジャカルタにおける政治文化資源としての非意図的な議論の場であるノンクロンは、住民たちにとって、政治知識（認識）、政治行動、政治感情の共有、交換、教育がおこなわれる現場であり、住民たちが個人個人で持っているそれらの政治素養を多角化・複合化させたり、実際の行動につなげたりすることに資するものであると考えられる。

(2) 政治文化資源としてのノンクロンと政治素養涵養の効果から、住民同士による非意図的な議論の場を支える環境要因を取り上げ、そのような住民を取り巻く環境を改めて政治文化資源としてのありかたの仮説を生成する。

今回のノンクロン調査から非意図的な議論の場を支える環境要因についていくつか

特徴があることが示される。まず一つは「情報収集可能性」である。ノンクロン①のラジオ、ノンクロン②のWi-Fi、ノンクロン③のテレビニュースのように、情報収集が容易な地点において、住民の議論の場は活性化される。次に「会話可能性」である。ノンクロンが発生していなかった場所として、国立博物館、国立図書館が挙げられ、資料・史料に富んでいるが、静謐、厳格で会話をしにくく、住民同士による政治素養涵養の場とはなりえないことがわかった。また国立美術館や国立博物館では写真を撮ってインスタグラム等のSNSにアップする若者が多くみられ、それらへ訪れることはステータスを誇示する道具とはなりえるが、やはり議論は行われていなかったため、また実際に投稿された投稿を追跡してもオンライン上での議論が公開で行われた様子はないため、住民同士による政治素養の教育・共有を支える環境要因として会話をすることが許される場所であることが特徴づけられる。反対に会話が可能な場所であれば、ノンクロン④のような路肩でもタバコを片手に政治素養の共有は可能なのである。最後に「滞在可能性」が挙げられる。カフェのようにコーヒー一杯で一時間近く時間を費やせる場所（ノンクロン②）、顔見知りの常連でおしゃべりしながら朝食、食後のインスタントコーヒー、デザートまで楽しめる屋台（ノンクロン③）、暑いインドネシアの気候下で日陰に入り比較的涼しく過ごせる場所（ノンクロン④）、など物理的・心理的に長く滞在できる場所で住民の非意図的な議論は活性化すると考えられる。つまり、住民同士による非意図的な議論の場を支える環境要因として、情報収集可能性、会話可能性、滞在可能性が挙げられ、これらが重なる「場」

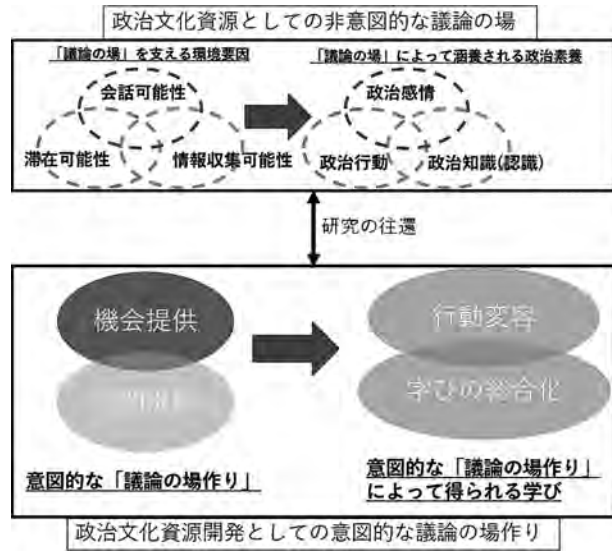


図3 政治文化資源としての「議論の場」（筆者作成）

は住民の非意図的な議論の場を活性化させる政治文化資源として位置づけできる。

上述 (1)、(2) の考察を複合すると、情報収集可能性、会話可能性、滞在可能性のそれぞれが高く、それらが重なった地点で住民の非意図的な議論の場は活性化され、その議論の場は政治知識（認識）、政治素養、政治行動によって構成される政治素養を住民同士で涵養する政治文化資源としての場として位置づけられる（図3）。

## 7. 今後の展望

本研究は政治文化資源としての非意図的な議論の場の教育的意義・効果の検証と、そこから見出される、政治文化資源として位置づけされる「場」について仮説を生成した。本研究から見出された議論の場の生成環境である「情報収集可能性」、「会話可能性」、「滞在可能性」と醸成される政治素養である「政治知識（認識）」、「政治感情」、「政治行動」の間の関連性を調査する必要性があると考えられる。今後はこの仮説に基

づき地点を選定し、今回の調査では行うことのできなかった定点定時的観察・参与を行い、住民の政治素養涵養についてより深く実態を把握し、文化資源としてもちうる教育への示唆、政治への貢献を分析する。換言すれば、住民が非意図的に議論する場の生成環境について考察を深めることで、先述した「空間提供による議論の場作り」、「機会提供による議論の場作り」に対しても文化資源を活用した場作りとして、あるいは「政治文化資源開発としての議論の場作り」として、改めて示唆を与えることが可能である。また、政治文化資源を通じて涵養された政治素養が住民の実際の政治行動にどれほど影響するのか、2024年に実施されるインドネシア大統領選挙に焦点を当てながら調査を継続したいと考えている。したがって今後おこなわれる研究では、政治文化資源としての「情報収集可能性」、「会話可能性」、「滞在可能性」を持つ場に焦点を当て、「政治知識（認識）」、「政治感情」、「政治行動」のそれぞれへの影響を実際の政治イシューを取り上げて詳細に検証しながら、意図的な議論の場作りとの間を往還する研

究を実践する必要がある（図4）。

## 脚注

<sup>1)</sup> 2022年9月当時、GojekアプリのCEOがインドネシア教育担当大臣として雇用されていて、コロナパンデミックの影響によるロックダウン下で学校と家庭の間の教材・宿題の受け渡しをGojekドライバーたちが請け負っていた。その他、公共交通機関等もマヒしたため、人々がいわゆる「三密」を避けて利用できる移動手段としてGojekは役割を果たし、その役割の促進のためにも、政府はドライバーたちに補助金を支払っていたが、2022年9月でその補助金が打ち切られ、ガソリンの値上がりも併せて収入が目減りしたドライバーが多くいた。ドライバーたちは値上げを余儀なくされ、それにたいして利用者、主に車やバイクを持たない大学生が、反発した。ドライバーたちと利用者、両者ともにガソリン補助金やGojek補助金打ち切りに対する抗議デモを起こした（ジョグジャカルタでは2022年9月8日にデモが起こった）。

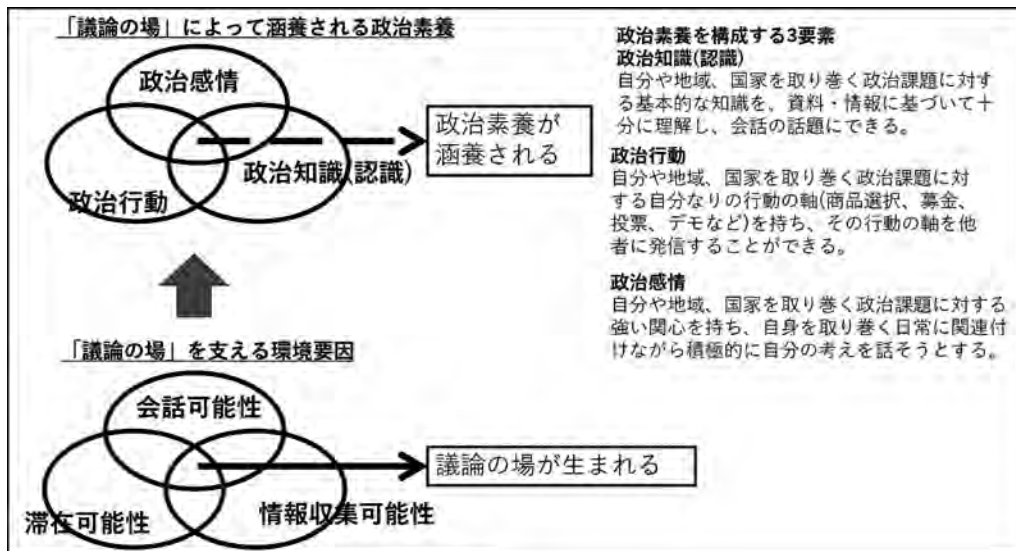


図4 政治文化資源としての「議論の場」の研究的展望（筆者作成）

## 主要参考文献

### (英語文献)

- Atmodiwirjo, Paramita (2008) “The Use of Urban Public Places in Jakarta for Adolescents’ Hanging Out”, *Journal of Asian Architecture and Building Engineering*, Vol.7, pp.339-346
- Dahl, Sonja (2016) “Nongkrong and Non-Productive Time in Yogyakarta’s Contemporary Arts”, *Parse Journal*, Issue 4, pp. 108-119
- ODonnell, Patrick, and Anderson, Lorraine (2022) “The University Library: Places for Possibility”, *New Review of Academic Librarianship*, Vol.28, No.3, pp.232-235
- Parinduri, Rasyad (2019) “Does education increase political participation? Evidence from Indonesia”, *Education Economics*, Vol.27, No.6, pp.645-657.
- Sullivan, Rebecca (2010) “Common Knowledge: Learning Spaces in Academic Libraries, College and Undergraduate Libraries”, *College and Undergraduate Libraries*, Vol.17 pp.130-148
- Wild, Anthony (2005) “Coffee: A dark history”, *New York: W. W. Norton.*

### (日本語文献)

- 小田博志 (2010) 『エスノグラフィー入門』春秋社.
- 加藤久則 (2021) 『インドネシアー世界最大のイスラームの国』筑摩書房.
- 川村晃一 (2015) 『新興民主主義大国インドネシア—ユドヨノ政権の10年とジョコウィ大統領の誕生』日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- 川島武宜 (1967) 『日本人の法意識』岩波書店.
- 菊地暁 (2022) 『民俗学入門』岩波書店.
- 佐藤健二 (2018) 『文化資源学講義』東京大学出版.
- 中村尚司 (1994) 『人びとのアジア—国際学の視座から—』岩波書店.
- ブルデュー、パスロン、宮島喬訳 (1991) 『再生産—教育・社会・文化』藤原書店.
- 松井和久編 (2003) 『インドネシアの地方分権化：分権化をめぐる中央・地方のダイナミクスとリアリティー』日本貿易振興機構アジア経済研究

所.

- 水野葉舟 (1985) 『三里塚散歩』葉舟会.
- 柳田國男 (1993) 『明治大正史 世相篇 新装版』講談社文庫.
- 柳田國男 (2017) 『都市と農村 岩波文庫版』岩波書店. (初版 1929)

# The Study of the Cultural Resources in Jogjakarta, Indonesia -Café, Food-stands, and Smoking as Unplanned Places for Political Socialization-

Francis Hikaru OBA

*Graduate School of Hiroshima University*

Tatsuya KUSAKABE

*Center for the Study of International Cooperation in Education, Hiroshima University*

This research explores the role and possibility of Cultural Resources on Urban citizens' political socialization in Indonesia.

In Indonesia, it is said that after the fall of the Suharto regime in 1998, the authoritarian centralized system was corrupted, and democratization and decentralization progressed. However, local councils are not structured so that the will of the people from the bottom can reach the top. In other words, “state-local relations” continue to maintain a top-down governance system, and it is difficult to see the political voice and policy reflection of the people. Therefore, it is necessary to look at how public opinion at the local grassroots level is cultivated and educated. This research will provide a background description of the formation of public opinion in each locality, which has not been clearly depicted in the past.

This research focuses on “political chat,” which takes place in “*Nongkrong* (out-purposed conversation)” such as cafes, food stands, and smoking places in Indonesia. It illustrates how public opinion is formed through the education and cultivation of political socialization in the region. In this study, *Nongkrong* is not only considered as a chatting place, but also as a “place to cultivate political sophistication”, so this study conducted an observational study of *Nongkrong* conversations in Yogyakarta. Sato (2018) assigns the concept of “cultural resources” as providing cultural capital to the residents. Inspired by this concept, this study defined “Politi-Cultural resources” as places where people exchange opinions, learn from their elders, and sublimate their “secretly held public opinion” into Citizens' Will. Through *Nongkrong* observation, it is clearly valued as “Politi-Cultural Resources” what people talk and where people talk.

As a result, it is confirmed that *Nongkrong* is a “place” for education and cultivation outside of school, where the residents can acquire political socialization in close relationships with each other from the viewpoints of “Political Knowledge”, “Political Action”, and “Political Feeling”. Regarding such a “place,” this research shows that “chattability”, “stability”, and “information accessibility” are factors that enhance *Nongkrong* to cultivate political sophistication, and those places are valued as “Politi-Cultural Resources” as well as *Nongkrong* itself.

Keywords: Cultural Resources, Political Sophistication, *Nongkrong*, Place Planning